

吟 題	作 者	教 本	ページ
【I 卷】			
大正天皇御製（一） 歳朝皇子に示す		I 卷	2
大正天皇御製（二） 宝刀		I 卷	3
朗詠（声気堂堂～）	新田 興	I 卷	4
新年雪裏の梅花～（春光初めて動けども寒～）	有智子内親王	I 卷	5
秋日友人に別る（林葉翩翩秋日曛れ～）	巨勢識人	I 卷	6
九月十日（去年の今夜～）	菅原道眞	I 卷	7
客中（吟髪霜白～）	一休宗純	I 卷	8
九月十三夜（霜は軍営に満ちて～）	上杉謙信	I 卷	9
山居（青山高く聳ゆ白雲の辺～）	藤原惺窩	I 卷	10
武野の晴月（武陵の秋色～）	林 羅山	I 卷	11
富士山（仙客来たり遊ぶ～）	石川丈山	I 卷	12
春日の作（楊柳花飛んで～）	新井白石	I 卷	13
還館口号（甲陽の美酒～）	荻生徂徠	I 卷	14
田園雜興（矮籬風圧して牽牛掛かり～）	伊藤東涯	I 卷	15
関山月（秦嶺西に去れば～）	祇園南海	I 卷	16
夜墨水を下る（金竜山畔～）	服部南郭	I 卷	17
晩秋舟行（晴江秋静かにして～）	市河寛斎	I 卷	18
先妣の十七回忌～（旧夢茫茫たり十七春～）	菅 茶山	I 卷	19
不識庵機山を撃つ凶に題す（鞭声肅肅～）	頼 山陽	I 卷	20
志を言う（俯しては郷国を思い～）	藤田東湖	I 卷	21
桂林荘雜詠諸生に示す（道うことを休めよ他郷～）	広瀬淡窓	I 卷	22
老泣（老泣声無く～）	梁川星巖	I 卷	23
松前城下の作（海城の寒柝～）	長尾秋水	I 卷	24
夏の夜（雨晴れて庭上竹風多し～）	江馬細香	I 卷	25
芳野（古陵の松柏～）	藤井竹外	I 卷	26
芳野懷古（暁ならんと欲するの溪山～）	正牆適處	I 卷	27
蛩を観る（柳外の流光～）	大槻磐溪	I 卷	28
岐阜竹枝（郭を環りて～）	森 春濤	I 卷	29
楠公子に訣るの凶（忠諫行われずんば～）	大沼枕山	I 卷	30
北海道巡遊中作（蹇蹇匪躬～）	伊藤博文	I 卷	31
金州城下の作（山川草木～）	乃木希典	I 卷	32
磯浜望洋樓に登る（夜登る百尺～）	三島中洲	I 卷	33
貴者四章時勢に感ずる～（貴者は高きを忘れ～）	石田東陵	I 卷	34

紅葉館にて饗飲席上率に賦す（七十の青涯～）	國分青厓	I 卷	35
夏日偶成（午倦書を抛って～）	三浦英蘭	I 卷	36
甲戌の冬舟中に月を～（念慮に一毫も差えば～）	中江藤樹	I 卷	37
和歌の題を～（昨夜～）	山縣周南	I 卷	38
母を憶う（秋風～）	頼 山陽	I 卷	39
夏初桜祠に遊ぶ（花開きて万人集い～）	広瀬旭荘	I 卷	40
漫述（誘る者は汝の～）	佐久間象山	I 卷	41
寒梅（庭上の一寒梅～）	新島 襄	I 卷	42
偶感（孤峰～）	勝 海舟	I 卷	43
自訟（岳に登りて天下を小とし～）	杉浦重剛	I 卷	44
九日後朝同に愁思を～（丞相年を渡りて～）	菅原道眞	I 卷	46
姑蘇台（姑蘇台上～）	絶海中津	I 卷	48
一乗寺に遊ぶ（秋色蒼茫として～）	伊藤仁齋	I 卷	50
近江八景（堅田の落雁～）	大江敬香	I 卷	52
桜花の詞（薄命能く伸ぶ～）	逸 名	I 卷	54
雑詩（防秋復た返らず～）	皆川淇園	I 卷	56
富士山（誰か東海の水を～）	柴野栗山	I 卷	58
失題（一貫唯唯として諾す～）	西郷南洲	I 卷	60
散歩（散歩流水に沿う～）	梁川紅蘭	I 卷	62
桜花行（帝桜花の国を造って～）	副島蒼海	I 卷	64
無欲（欲無ければ～）	良 寛	I 卷	66
本能寺（本能寺～）	頼 山陽	I 卷	68
塾生に示す（君が曹士為らんと欲せば～）	尾藤二洲	I 卷	70
新潟に宿す（雪を排し来たって～）	吉田松陰	I 卷	74
偶成（一穂の寒燈～）	木戸孝允	I 卷	76
橋上月に立つ（首を低るれば～）	村上佛山	I 卷	79
白虎隊（少年団結す～）	佐原盛純	I 卷	81
梅溪の春暁（千巖～）	上 夢行	I 卷	85
湘江を渡る（遅日園林昔遊を悲しむ～）	杜 審言	I 卷	90
涼州詞（黄河遠く上る～）	王 之涣	I 卷	91
涼州詞（葡萄の美酒～）	王 翰	I 卷	92
出塞行（白草原頭京師を望めば～）	王 昌齡	I 卷	93
元二の安西に使用するを送る（渭城の朝雨～）	王 維	I 卷	94
峨眉山月の歌（峨眉山月～）	李 白	I 卷	96
塞上にて吹笛を聞く（雪浄くして～）	高 適	I 卷	97

塞下の曲（北海の陰風～）	常 建	I 卷	98
軍城早秋（昨夜秋風～）	嚴 武	I 卷	99
京に入る使いに逢う（故園東に望めば～）	岑 参	I 卷	100
春行興を寄す（宜陽城下草萋萋～）	李 華	I 卷	101
楓橋夜泊（月落ち烏啼いて～）	張 繼	I 卷	102
帰雁（瀟湘より何事ぞ～）	錢 起	I 卷	103
楊柳枝詞（煬帝の行宮～）	劉 禹錫	I 卷	104
山行（遠く寒山に上れば石径斜なり～）	杜 牧	I 卷	105
夜雨北に寄す（君帰期を問えども～）	李 商隱	I 卷	106
画眉鳥（百轉千声～）	歐陽 修	I 卷	107
初夏（四月清和雨乍ち晴れ～）	司馬 光	I 卷	108
夜直（金炉香尽きて～）	王 安石	I 卷	109
初冬の作（荷は尽きて已に雨を撃ぐるの～）	蘇 軾	I 卷	110
児に示す（死し去れば本知る万事空しきを～）	陸 游	I 卷	111
江村晚眺（江頭の落日平沙を照らす～）	戴 復古	I 卷	112
東城（野店の桃花紅粉の姿～）	趙 孟頫	I 卷	113
夜天池に宿し～（昨夜月明～）	王 陽明	I 卷	114
高郵雨泊（寒雨の秦郵に夜船を泊す～）	王 士禛	I 卷	115
易水の送別（此の地～）	駱 賓王	I 卷	116
春曉（春眠曉を覚えず～）	猛 浩然	I 卷	117
袁氏の別業に題す（主人～）	賀 知章	I 卷	118
静夜思（牀前月光を看る～）	李 白	I 卷	119
秋日（返照閭巷に入る～）	耿 滄	I 卷	120
秋夜丘二十二員外に寄す（君を懐うて秋夜に～）	韋 應物	I 卷	121
酒を勧む（君に勧む～）	于 武陵	I 卷	122
江南故人に寄す（曾て錢塘に向いて住す～）	家 鉉翁	I 卷	123
曉に順城門を出で何太虚を～（歩して出ず～）	揭 傒斯	I 卷	124
家書を得たり（未だ書中の語を読まずして～）	高 啓	I 卷	125
京師にて家書を得たり（江水三千里～）	袁 凱	I 卷	126
虞姫（大王真に英雄～）	吳 永和	I 卷	127
古意（蘆家の少婦鬱金の堂～）	沈 佺期	I 卷	128
黄鶴楼（昔人已に黄鶴に乗じて去り～）	崔 顥	I 卷	130
登楼（花は高楼に近うして客心を傷ましむ～）	杜 甫	I 卷	132
長安春望（東風雨を吹いて青山を過ぐ～）	盧 綸	I 卷	134
柳州の城楼に～（城上の高楼～）	柳 宗元	I 卷	136

左遷せられて藍関に至り～（一封朝に奏す～）	韓 愈	I 卷	138
香炉峰下新に山居を～（日高く睡り足りて～）	白 居易	I 卷	140
八月十五夜～（銀台金闕～）	白 居易	I 卷	142
湖辺の荘に題す（十里の青山～）	朱 熹	I 卷	144
三月三日重ねて虎邱に遊ぶ（細雨霏霏として～）	郭 麟孫	I 卷	146
秋日弟を懐う（生涯汝の自ら樵蘇するを～）	謝 榛	I 卷	148
赤壁（一面の東風百万の軍～）	袁 枚	I 卷	150
友人を送る（青山～）	李 白	I 卷	152
春望（国破れて山河在り～）	杜 甫	I 卷	154
太白山下早行して～（馬上に残夢を続き～）	蘇 軾	I 卷	156
山中の月（我は愛す山中の月～）	眞 山民	I 卷	158
太白楼に登る（昔聞く李供奉～）	王 世貞	I 卷	160
垓下の歌（力山を抜き～）	項 羽	I 卷	162
大風の歌（台風起こりて雲飛揚す～）	高 祖	I 卷	163
七歩の詩（豆を煮るに豆萁を燃く～）	曹 植	I 卷	164
貧交行（手を翻せば雲と作り～）	杜 甫	I 卷	165
白頭吟（皚たること～）	卓 文君	I 卷	166
古詩（明月皎として～）	（作者不詳）	I 卷	169
秋風の辞（秋風起こって白雲飛び～）	漢の武帝	I 卷	172
園田の居に帰る（少くして～）	陶 潜	I 卷	174
斎中読書（昔余京華に遊べども～）	謝 靈運	I 卷	178
秘書晁監が日本に還るを送る（積水～）	王 維	I 卷	181
勸学の歌（子を養いて教えざるは～）	司馬 光	I 卷	184
湘夫人の詠（木蘭芙蓉芳州に満つ～）	元 好問	I 卷	187
【II 卷】			
後夜仏法僧鳥を聞く（閑林独坐す～）	空 海	II 卷	3
八月十五夜月前に旧を語る（秋月は知らず～）	菅原道眞	II 卷	4
海南行（人生五十～）	細川頼之	II 卷	5
偶作（麤殺す江南～）	武田信玄	II 卷	6
忍字に題す（一たび忍べば七情～）	中江藤樹	II 卷	7
戊子の夏諸生と月を～（清風座に満ち～）	中江藤樹	II 卷	8
感有り（坐るに憶う天公の～）	山崎闇齋	II 卷	9
早に深川を発す（月落ちて人煙曙色分かる～）	平野金華	II 卷	10
白雲山に登る（白雲山上～）	太宰春臺	II 卷	11
子和の参州に～（唱うるを休めよ陽関～）	山縣周南	II 卷	12

月夜三叉江に舟に泛ぶ（三叉中断す～）	高野蘭亭	Ⅱ卷	13
赤馬が関を過ぐ（長風浪を破って～）	伊形靈雨	Ⅱ卷	14
江月（満江の明月満天の秋～）	龜田鵬齋	Ⅱ卷	15
冬夜読書（雪は山堂を擁して樹影深し～）	菅 茶山	Ⅱ卷	16
生田に宿す（千歳の恩～）	菅 茶山	Ⅱ卷	17
半夜（首を回らせば～）	良 寛	Ⅱ卷	18
八幡公（結髪軍に従って～）	頼 山陽	Ⅱ卷	19
舟大垣を発して桑名に赴く（蘇水遙遙～）	頼 山陽	Ⅱ卷	20
中秋無月母に侍す（此の夜を同うせざること～）	頼 山陽	Ⅱ卷	21
楠公子に訣るるの因（海甸の陰風～）	頼 山陽	Ⅱ卷	22
母を奉じて嵐山に遊ぶ（嵐山に到らざること～）	頼 山陽	Ⅱ卷	23
江都客裡雑詩（八百八街宵月明らかなり～）	頼 杏坪	Ⅱ卷	24
芳野に遊ぶ（万人酔を買って～）	頼 杏坪	Ⅱ卷	25
四十七士（臥薪嘗胆幾辛酸～）	大塩平八郎	Ⅱ卷	26
夜坐（金風颯颯群陰を醸す～）	藤田東湖	Ⅱ卷	27
桂林莊雜詠諸生に示す（遥かに思う白髪～）	広瀬淡窓	Ⅱ卷	28
常盤孤を抱くの因（雪は笠檐に灑いで風袂を～）	梁川星巖	Ⅱ卷	29
芳野（今来古往～）	梁川星巖	Ⅱ卷	30
壁に題す（男児志を立てて郷関を出ず～）	釋 月 性	Ⅱ卷	31
將に東遊せんとして壁に～（男児志を立てて～）	釋 月 性	Ⅱ卷	31
訣別（妻は病床に臥し～）	梅田雲濱	Ⅱ卷	32
大楠公（豹は死して皮を留む～）	徳川齊昭	Ⅱ卷	33
弘道館にて梅花を賞す（弘道館中千樹の梅～）	徳川齊昭	Ⅱ卷	34
出郷の作（決然国を去って～）	佐野竹之助	Ⅱ卷	35
舟由良港に至る（首を回らせば蒼茫たり～）	吉村虎太郎	Ⅱ卷	36
芳野（山禽叫び断えて～）	河野鐵兜	Ⅱ卷	37
壇の浦夜泊（篷窓月落ちて眠りを成さず～）	木下犀潭	Ⅱ卷	38
山行同志に示す（路は羊腸に入って～）	草場佩川	Ⅱ卷	39
失題（神知靈覺湧いて泉の如し～）	横井小楠	Ⅱ卷	40
客舎の壁に題す（斯の志を成さんと欲して～）	雲井龍雄	Ⅱ卷	41
述懐（慷慨山の如く～）	雲井龍雄	Ⅱ卷	42
月照十七回忌（相約して淵に投ず～）	西郷南洲	Ⅱ卷	43
偶感（幾度か辛酸を歴て～）	西郷南洲	Ⅱ卷	44
偶成（才子才を恃み～）	木戸孝允	Ⅱ卷	45
春日山懷古（春日山頭晚霞鎖～）	大槻磐溪	Ⅱ卷	46

道灌蓑を借るの図に題す（孤鞍雨を衝いて～）	（作者不詳）	Ⅱ巻	47
河内路上（南朝の古木～）	菊池溪琴	Ⅱ巻	48
中庸（勇力の男児は勇力に斃れ～）	元田東野	Ⅱ巻	49
新涼書を読む（秋は動く梧桐葉落つるの初～）	菊池三溪	Ⅱ巻	50
結婚祝いの詩（今夜瑤台～）	加藤雍軒	Ⅱ巻	51
某楼に飲す（豪気堂堂～）	伊藤博文	Ⅱ巻	52
爾靈山（爾靈山は陰なれども～）	乃木希典	Ⅱ巻	53
神州（峻嶒たる富岳千秋に聳ゆ～）	乃木希典	Ⅱ巻	54
城山（孤軍奮闘圍みを破って還る～）	西 道仙	Ⅱ巻	55
失題（才子元来多く事を過る～）	古荘嘉門	Ⅱ巻	56
岩崎谷の洞に題す（百戦功無し～）	杉 聴雨	Ⅱ巻	57
太平洋（日は浪より昇りて又波に沈む～）	安達漢城	Ⅱ巻	58
結婚祝いの詩（泰山の竹～）	土屋竹雨	Ⅱ巻	59
平の敦盛（笛声嫋嫋人の腸を断つ～）	網谷一才	Ⅱ巻	60
自詠（家を離れて三四月～）	菅原道眞	Ⅱ巻	61
辞世（吾今国の為に死す～）	吉田松陰	Ⅱ巻	62
秋夜（黄萎の顔色白霜の頭～）	菅原道眞	Ⅱ巻	63
門を出でず（一たび謫落して～）	菅原道眞	Ⅱ巻	65
筑前城下の作（伏敵門頭浪天を拍つ～）	広瀬淡窓	Ⅱ巻	67
水戸八景（雪時嘗て賞す～）	徳川齊昭	Ⅱ巻	69
児島高德桜樹に～（踏破る千山～）	斎藤監物	Ⅱ巻	71
述懐（十有三春秋～）	頼 山陽	Ⅱ巻	73
天草洋に泊す（雲か山か～）	頼 山陽	Ⅱ巻	75
冑山の歌（冑山昨我を送り～）	頼 山陽	Ⅱ巻	77
前兵児の謡（衣は肝に至り袖腕に至る～）	頼 山陽	Ⅱ巻	79
獄中感有り（朝に恩遇を蒙りて～）	西郷南洲	Ⅱ巻	81
書懐（一葦纒に西すれば～）	（作者不詳）	Ⅱ巻	83
大楠公（赤坂の城千早の屯～）	河野天籟	Ⅱ巻	85
結婚祝いの詩（良縁成立して～）	木村岳風	Ⅱ巻	87
母を送る路上の短歌（東風に～）	頼 山陽	Ⅱ巻	89
侍輿の歌（余芸に到りて留まること～）	頼 山陽	Ⅱ巻	92
蒙古来（筑海の颯気～）	頼 山陽	Ⅱ巻	95
静御前（工藤の銅拍秩父の鼓～）	頼 山陽	Ⅱ巻	98
獄中作（君見ずや死して忠鬼と為る～）	高杉晋作	Ⅱ巻	100
棄児行（斯の身飢ゆれば～）	雲井龍雄	Ⅱ巻	102

小楠公（乃父の訓は骨に銘じ〜）	元田東野	Ⅱ巻	105
なき数に入る名をぞ〜（鏃を以って筆に代え〜）		Ⅱ巻	106
正気の歌（死生命有り論ずるに足らず〜）	広瀬武夫	Ⅱ巻	109
吉次峠の戦（君見ずや吉次の陰は〜）	佐佐友房	Ⅱ巻	113
双殉行（戦雲城を圧して城壊れんと欲す〜）	竹添井井	Ⅱ巻	116
嗚呼忠臣楠子の墓（嗚呼忠臣〜）	生田鐵石	Ⅱ巻	120
原爆行（怪光一綫蒼旻より下る〜）	土屋竹雨	Ⅱ巻	124
母の心（溽暑湘南〜）	大野孤山	Ⅱ巻	128
城東の荘に宴す（一年初めて一年の春有り〜）	崔 敏童	Ⅱ巻	133
郷に回りて偶書す（少少家を離れて〜）	賀 知章	Ⅱ巻	134
従軍行（秦時の明月漢時の関〜）	王 昌齡	Ⅱ巻	135
早に白帝城を発す（朝に辞す白帝彩雲の間〜）	李 白	Ⅱ巻	136
廬山の瀑布を望む（日は香炉を照らして〜）	李 白	Ⅱ巻	137
春夜洛城に笛を聞く（誰が家の玉笛か暗に〜）	李 白	Ⅱ巻	138
洞庭に遊ぶ（洞庭西に望めば楚江分かる〜）	李 白	Ⅱ巻	139
客中行（蘭陵の美酒〜）	李 白	Ⅱ巻	140
山中間答（余に問う何の意あって〜）	李 白	Ⅱ巻	141
天門山を望む（天門中断して楚江開く〜）	李 白	Ⅱ巻	142
長安主人の壁に題す（世人交わりを結ぶに〜）	張 謂	Ⅱ巻	143
十五夜月を望む（中庭地白くして樹鴉を〜）	王 建	Ⅱ巻	144
江南の春（千里鶯啼いて緑紅に映ず〜）	杜 牧	Ⅱ巻	145
烏江亭に題す（勝敗は兵家も〜）	杜 牧	Ⅱ巻	146
江楼にて感を書す（独り江楼に上りて〜）	趙 嘏	Ⅱ巻	147
春夜（春宵一刻値千金〜）	蘇 軾	Ⅱ巻	148
酔うて祝融峰を下る（我来たつて万里〜）	朱 熹	Ⅱ巻	149
偶成（少年老い易く〜）	朱 熹	Ⅱ巻	150
雪梅（梅有りて雪無ければ精神ならず〜）	方 岳	Ⅱ巻	151
睡起偶成（四十余年睡夢の中〜）	王 陽明	Ⅱ巻	152
海に泛ぶ（陰夷原〜）	王 陽明	Ⅱ巻	153
勸学（盛年重ねて来たらず〜）	陶 潜	Ⅱ巻	154
四時（春水四沢に満ち〜）	陶 潜	Ⅱ巻	155
別詩（洛陽城の〜）	范 雲	Ⅱ巻	156
鶴鶴楼に登る（白日山に依りて尽き〜）	王 之渙	Ⅱ巻	157
鹿柴（空山〜）	王 維	Ⅱ巻	158
絶句（江碧にして鳥逾白く〜）	杜 甫	Ⅱ巻	159

農を憫む（禾を鋤きて～）	李 紳	Ⅱ卷	160
胡隱君を尋ね（水を渡り復水を渡り～）	高 啓	Ⅱ卷	161
山中諸生に示す（溪辺流水に坐す～）	王 陽明	Ⅱ卷	162
偶然の作（百金駿馬を買い～）	屈 復	Ⅱ卷	163
滕王閣（滕王の高閣江渚にのぞむ～）	王 勃	Ⅱ卷	164
帰省（幾度か天蓋～）	狄 仁傑	Ⅱ卷	166
酒を酌んで裴迪に与う（酒を酌んで君に与う～）	王 維	Ⅱ卷	168
笛を吹く（笛を吹く秋山～）	杜 甫	Ⅱ卷	170
秋日偶成（閑来事として従容たらざるは～）	程 明道	Ⅱ卷	172
勸学の文（謂う勿れ今日学ばずして～）	朱 熹	Ⅱ卷	174
零丁洋を過ぐ（辛苦漕逢～）	文 天祥	Ⅱ卷	176
梅花（瓊姿只合に～）	高 啓	Ⅱ卷	178
山中の雲（我は愛す山中の雲～）	眞 山民	Ⅱ卷	180
江上吟（木蘭の樵沙棠の舟～）	李 白	Ⅱ卷	182
月下独酌（花間一壺の酒～）	李 白	Ⅱ卷	185
飲中八仙歌（知章が馬に騎るは～）	杜 甫	Ⅱ卷	188
胡笳の歌（君聞かずや胡笳の声～）	岑 參	Ⅱ卷	192
慈烏夜啼く（慈烏其の母を失い～）	白 居易	Ⅱ卷	195
啾啾吟（知者は惑わず仁者は憂えず～）	王 陽明	Ⅱ卷	199
【Ⅲ卷】			
塞下の曲に和し奉る（胡兒塞月～）	巨勢識人	Ⅲ卷	3
雨後楼に登る（一天の過雨～）	絶海中津	Ⅲ卷	4
新正口号（淑気未だ融らず春尚遅し～）	武田信玄	Ⅲ卷	5
乱を避け～（江湖に落魄して～）	足利義昭	Ⅲ卷	6
偶成（三十年来～）	武林唯七	Ⅲ卷	7
自ら肖像に題す（蒼顔鉄の如く～）	新井白石	Ⅲ卷	8
秋夕琵琶湖に泛ぶ（湖北湖南暮色濃やかなり～）	梁田蛻巖	Ⅲ卷	9
山中の月（驚き見る東山～）	藪 孤山	Ⅲ卷	10
月夜禁垣の外を歩む（上苑の西風～）	柴野栗山	Ⅲ卷	11
桶狭間を過ぐ（荒原古を吊う古墳の前～）	大田錦城	Ⅲ卷	12
攝州路上（酒家の紛壁晴波に映ず～）	頼 山陽	Ⅲ卷	13
泉岳寺の作（山岳崩すべし海翻すべし～）	坂井虎山	Ⅲ卷	14
将に小梅村の～（青年此の地～）	藤田東湖	Ⅲ卷	15
春夕（月は訪れて梅花好主と為り～）	佐藤一斎	Ⅲ卷	16
函嶺を過ぐ（当年の意気～）	頼 三樹三郎	Ⅲ卷	17

富士山（秦皇薬を採り～）	安積良齋	Ⅲ巻	18
天姥山（天姥山頭秋月明らかに～）	佐久間象山	Ⅲ巻	19
遣懐（皇国の威名海外に鳴る～）	久坂玄瑞	Ⅲ巻	20
花朝澱江を下る（桃花水暖かにして～）	藤井竹外	Ⅲ巻	21
暁に発す（残月の滴露～）	月田蒙齋	Ⅲ巻	22
焦心録後に題す（内憂外患吾が州に迫る～）	高杉晋作	Ⅲ巻	23
雪中梅を見る（寒蓑立ち尽くす水の涯～）	寺門静軒	Ⅲ巻	24
逸題（胡塵を掃うて～）	江藤新平	Ⅲ巻	25
失題（去歳千軍我が疆に逼る～）	木戸孝充	Ⅲ巻	26
一声の仁（文を学びて主無ければ～）	西郷南洲	Ⅲ巻	27
桜井の駅（慇懃たる遺訓～）	西郷南洲	Ⅲ巻	28
亀山宮中の作（大海波鳴って～）	大久保利通	Ⅲ巻	29
平泉懐古（三世の豪華～）	大槻磐溪	Ⅲ巻	30
感懐（目に看る年年～）	松平春嶽	Ⅲ巻	31
西紅海舟中の作（煙は鎖す～）	中井櫻洲	Ⅲ巻	32
家兄に寄せて志を言う（勤王の大義～）	広瀬武夫	Ⅲ巻	33
田原坂～（雨は戦袍を撲ち風沙を捲く～）	佐佐友房	Ⅲ巻	34
陣中の作（稀に柳楊有るも竹梅無し～）	乃木希典	Ⅲ巻	35
凱旋（王師百万～）	乃木希典	Ⅲ巻	36
山中の歌（余に問う山中に棲むこと幾年ぞと～）	国分青厓	Ⅲ巻	37
偶成（富貴功名～）	瀬川雅亮	Ⅲ巻	38
春日村行（郊外筈を牽けば一路通ず～）	木村岳風	Ⅲ巻	39
潮頭（太平洋外水滔滔～）	徳富蘇峰	Ⅲ巻	40
霊山（三十六峰～）	徳富蘇峰	Ⅲ巻	41
時に憩う（薪を担いて翠岑を下る～）	良寛	Ⅲ巻	42
古に擬す（子を生まば～）	河野鉄兜	Ⅲ巻	43
楠公を詠ず（日東に聖人有り～）	日柳燕石	Ⅲ巻	44
山を看る（山を看れば～）	新島襄	Ⅲ巻	45
春日偶成（道う莫かれ風塵に老ゆと～）	夏目漱石	Ⅲ巻	46
銚港雑詠（鉅巖怒浪を排し～）	塩谷青山	Ⅲ巻	47
山中即事（雲来たって千嶂合し～）	市村器堂	Ⅲ巻	48
漫成（丈夫生れて～）	蒲生君平	Ⅲ巻	49
獄中作（雲を排し手ずから～）	頼三樹三郎	Ⅲ巻	51
笛を聞く（二月の梅花～）	服部南郭	Ⅲ巻	53
備後三郎詩を櫻樹に～（馬に騎りては賊を～）	菅茶山	Ⅲ巻	55

楠河州の墳に謁して作有り（東海の大魚～）	頼 山陽	Ⅲ卷	58
筑後河を下り～（文政の元十一月～）	頼 山陽	Ⅲ卷	65
炊煙起る（煙未だ浮かばず天皇愁いたもう～）	頼 山陽	Ⅲ卷	72
述懐（三たび死を決して～）	藤田東湖	Ⅲ卷	74
瓢やの歌（瓢や瓢や～）	藤田東湖	Ⅲ卷	77
鳳闕を拝す（山河襟帯～）	吉田松陰	Ⅲ卷	82
無題（落花粉粉～）	村上佛山	Ⅲ卷	85
書懐（人生元長からず～）	（作者不詳）	Ⅲ卷	87
偶成（天地生を育むに～）	勝 海舟	Ⅲ卷	89
兵児謡（負くれば是れ賊～）	末松謙澄	Ⅲ卷	93
新近江八景（瀬田の唐橋石山寺～）	木村岳風	Ⅲ卷	95
細川玉子（群雄覇を争いし～）	木村岳風	Ⅲ卷	97
無心（花は無心にして～）	良 寛	Ⅲ卷	99
文天祥の正気の歌に和す（天地正大の気～）	藤田東湖	Ⅲ卷	101
吉田義卿を送る（之の子霊骨有り～）	佐久間象山	Ⅲ卷	114
辺詩（五原の春色～）	張 敬忠	Ⅲ卷	119
越中懐古（越王勾踐～）	李 白	Ⅲ卷	120
蘇台覽古（旧苑の荒台楊柳新たなり～）	李 白	Ⅲ卷	121
黄鶴楼にて孟浩然が～（故人西のかた黄鶴楼～）	李 白	Ⅲ卷	122
山中にて幽人と対酌す（兩人対酌して山花く～）	李 白	Ⅲ卷	123
除夜の作（旅館の寒灯独り眠らず～）	高 適	Ⅲ卷	124
磧中の作（馬を走らせて西来天に到らんと～）	岑 參	Ⅲ卷	125
滁州の西澗（独り憐れむ幽草の澗辺に～）	韋 應物	Ⅲ卷	126
折楊柳（水辺の楊柳麴塵の糸～）	楊 巨源	Ⅲ卷	127
秋思（洛陽城裏秋風を見る～）	張 籍	Ⅲ卷	128
酒に対す（蝸牛角上～）	白 居易	Ⅲ卷	129
菊花（一夜新霜～）	白 居易	Ⅲ卷	130
暮立	白 居易	Ⅲ卷	131
金縷の衣（君に勸む惜しむ莫れ～）	杜 秋娘	Ⅲ卷	132
秦淮に泊す（煙は寒水を籠め月は沙を籠む～）	杜 牧	Ⅲ卷	133
清明（清明の時節雨紛紛～）	杜 牧	Ⅲ卷	134
山亭の夏日（緑樹陰濃やかにして～）	高 駢	Ⅲ卷	135
己亥の歳（沢国の江山～）	曹 松	Ⅲ卷	136
豊楽亭に春を遊ぶ（紅樹青山～）	歐陽 脩	Ⅲ卷	137
鍾山即事（澗水声無く竹を繞りて流る～）	王 安石	Ⅲ卷	138

望湖楼の酔書（黒雲墨を翻して～）	蘇 軾	Ⅲ巻	139
中秋の月（暮雲収まり尽くして清寒溢る～）	蘇 軾	Ⅲ巻	140
山間の秋夜（夜色秋光～）	眞 山民	Ⅲ巻	141
灌山の小隠に題す（一たび家を移して～）	王 陽明	Ⅲ巻	142
春日雑詩（千枝の紅雨万重の～）	袁 枚	Ⅲ巻	143
鏡に照らして白髪を見る（宿昔青雲の志～）	張 九齡	Ⅲ巻	144
秋浦の歌（白髪三千丈～）	李 白	Ⅲ巻	145
江雪（千山鳥飛び絶え万径～）	柳 宗元	Ⅲ巻	146
夜雪（已訝る～）	白 居易	Ⅲ巻	147
事に感ず（花開けば蝶枝に満つ～）	于 墳	Ⅲ巻	148
遠山（山色～）	欧陽 脩	Ⅲ巻	149
清夜の吟（月天心に到るの処～）	邵 雍	Ⅲ巻	150
春雨（春陰雨を成し易く～）	陸 游	Ⅲ巻	151
竜池篇（竜池竜躍って～）	沈 佺期	Ⅲ巻	152
金陵の鳳凰台に登る（鳳凰台上～）	李 白	Ⅲ巻	154
鸚鵡州（鸚鵡来たって過ぐ～）	李 白	Ⅲ巻	156
蜀相（丞相の祠堂何れの処にか尋ねん～）	杜 甫	Ⅲ巻	158
登高（風急に天高くして猿嘯哀し～）	杜 甫	Ⅲ巻	160
咸陽城の東楼（一たび高城に上れば～）	許 渾	Ⅲ巻	162
山園小梅（衆芳搖落して独り暄妍～）	林 逋	Ⅲ巻	164
夜坐（独り秋庭に坐すれば～）	王 陽明	Ⅲ巻	166
白頭を悲しむ翁に代る（洛陽城東～）	劉 廷芝	Ⅲ巻	168
春江花月の夜（春江の潮水海に連なって～）	張 若虞	Ⅲ巻	173
烏夜啼（黄雲城辺～）	李 白	Ⅲ巻	180
虞美人草（鴻門の玉斗紛として雪の如し～）	曾 鞏	Ⅲ巻	182
雑詩（人生根蒂無く～）	陶 潜	Ⅲ巻	186
【愛吟集】			
高山彦九郎を憶う（白雲鎖す処英魂を鎮む～）	河野天籟	愛吟集	3
晩春絶句（晴に非ず雨に非ず～）	住谷天来	愛吟集	4
福寿の詩（松竹梅花～）	木村岳風	愛吟集	5
感有り（徳義人情地を払って空し～）	本宮三香	愛吟集	6
丹頂の舞（寒山映し出す青湖の水～）	佐佐木岳甫	愛吟集	7
石狩川（長江嶽を～）	佐佐木岳甫	愛吟集	8
松竹梅（寿福愈開く松竹梅～）	松口月城	愛吟集	9
九段の桜（靖国の宮に御霊は鎮まるも～）	本宮三香	愛吟集	10

源義経(昔なつかし束稲の～)	網谷一才	愛吟集	12
巡礼お鶴(杖を力にとぼとぼと～)	網谷一才	愛吟集	14
青の洞門(断崖絶壁～)	網谷一才	愛吟集	16
名鎗日本号(美酒元来吾が好む所～)	松口月城	愛吟集	18
静御前(よしのやま みねのしらゆき ふみわけて～)	松口月城	愛吟集	19
新天草洋(雲か山か呉か越か～)	藤野君山	愛吟集	21
稗月の歌(屋島之浜～)	松口月城	愛吟集	23
逸題(飛雨蕭蕭孤雁鳴く～)	橋本左内	愛吟集	25
花月吟(花屋琴を弾ず～)	藤野君山	愛吟集	27
梅花の詩(五弁花開いて～)	本宮三香	愛吟集	29
合戦川中島(千曲の川霧～)	角光嘯堂	愛吟集	31
小楠公の母(南朝の烈婦姓は楠木～)	本宮三香	愛吟集	33
月夜荒城の曲を聞く(春高楼の花の宴～)	水野豊洲	愛吟集	36
安宅の関(暮鐘一点～)	角光嘯堂	愛吟集	39
後本能寺(宴已み高閣～)	頼 山陽	愛吟集	42
娑婆歌(縦い鉄鑊の湯を呑むとも～)	日柳燕石	愛吟集	47
獄中作(行くに輿無く～)	秋月胤永	愛吟集	50
国体篇(邈たり二千六百秋～)	岩崎行親	愛吟集	53
続け湯川博士に(少年老い易く学成り難し～)	木村岳風	愛吟集	58
碓を聞く(砧声断続～)	本宮三香	愛吟集	63
舟艇守の尺八(炎熱の夏は去りて秋風来たる～)	大野弧山	愛吟集	65
広瀬中佐(杉野杉野～)	鈴木豹軒	愛吟集	68
秋色信濃路(秋色一点信濃の天～)	角光嘯堂	愛吟集	72
悲恋菖藻の歌(秘煙千歳～)	佐佐木岳甫	愛吟集	75
曾我兄弟(富士の山風雨を交えて吹く～)	松口月城	愛吟集	79
鉢の木(駒とめて～)	松口月城	愛吟集	83
石童丸(麓の母を案じつつ～)	松口月城	愛吟集	86
茶道吟(花をのみ待つらむ人に山里の～)	藤原家隆・外	愛吟集	90
さくらの歌(さくらさくら 弥生の空は～)	素性・外	愛吟集	94
夏(うの花のにほふ垣根に～)		愛吟集	97
勅勒の歌(勅勒の川陰山の下～)	無氏名	愛吟集	103
竹里館(独り坐す幽篁の裏～)	王 維	愛吟集	104
新嫁の娘(三日の廚下に入り～)	王 建	愛吟集	105
寒江(溶溶漾漾～)	杜 牧	愛吟集	106
自詠(独り高楼に上って～)	呂 洞賓	愛吟集	107

恵崇の春江暁景（竹外の桃花～）	蘇 軾	愛吟集	108
【慶弔】			
新年祝いの詩（淑気乾坤万物新なり～）	木村岳風	慶弔	1
元旦初吟（初夢圓に迎う～）	木村岳風	慶弔	2
初夢（波静かに亀遊ぶ～）	本宮三香	慶弔	3
新年（客来って笑う野人の家に似たりと～）	藤井竹外	慶弔	4
宝船（寿海波平かにして紅旭鮮なり～）	藤野君山	慶弔	5
「万葉集より」新しき（新しき年のはじめの～）	葛井諸会	慶弔	6
祝事（今日紅を繞らして～）	佐佐木岳甫	慶弔	7
祝賀の詞（四海波平かにして～）	河野天籟	慶弔	8
富士山（仙客来たり遊ぶ～）	石川丈山	慶弔	10
「新古今集より」年毎に（年毎に生ひ添ふ～）	紀 貫之	慶弔	11
生誕を祝す（仙鶴一声翼を張りて鳴く～）	菊池東郭	慶弔	12
入学を祝す（玉若し磨かざれば～）	木村岳風	慶弔	13
卒業を祝す（螢雪功を積んで智徳を磨き～）	木村岳風	慶弔	14
同窓会の歌（満筵の佳客是れ同輩～）	谷口雲泉	慶弔	15
成人式（心身を鍛錬して志始めて堅し～）	落合東郭	慶弔	16
結婚祝（偕老盟成りて～）	安達漢城	慶弔	17
結婚祝の詩（良縁成立して～）	木村岳風	慶弔	18
松の葉の（松の葉の二葉一葉に色かえず～）	相馬御風	慶弔	20
四海波（四海波恬かにして～）	本宮三香	慶弔	21
結婚祝いの詩（泰山之竹～）	土屋竹雨	慶弔	22
結婚祝ひの詩（天の戸の真澄にならぶ二つ星～）	小田観螢	慶弔	23
いく千代の（いく千代の～）	内柴御風	慶弔	24
さしかはす（さしかはす枝むつまじく～）	中島広陰	慶弔	25
結婚を祝す（婦と為り夫と為る～）	松口月城	慶弔	26
新築を賀す（建築功成りて新屋香ばし～）	松口月城	慶弔	27
「新古今集より」曇りなく（曇りなく千歳に～）	紫 式部	慶弔	28
「新古今集より」わが君は（わが君は～）	読人知らず	慶弔	29
今様（君が晴衣のみ…。他4題）		慶弔	30
銀婚式（二十五年清福多し～）	古川松梁	慶弔	32
金婚を祝す（鴛鴦一たび～）	本宮三香	慶弔	33
華甲を祝す（華甲躋り来って～）	松口月城	慶弔	34
古希を寿ぐ	松口月城	慶弔	35
喜寿を賀す（七十七齡～）	松口月城	慶弔	36

米寿を賀す（延齡～）	松口月城	慶弔	37
湘江を渡る（遅日園林昔遊を悲しむ～）	杜 審言	慶弔	39
宇文六を送る（花は垂楊に映じて～）	常 建	慶弔	40
芙蓉楼にて辛漸を送る（寒雨江に連なって～）	王 昌齡	慶弔	41
元二の安西に使用するを送る（渭城の朝雨～）	王 維	慶弔	42
送別（君を南浦に送りて涙糸の如し～）	王 維	慶弔	43
董大に別る（十里の黄雲白日曛れ～）	高 適	慶弔	44
汪倫に贈る（李白舟に乗りて～）	李 白	慶弔	45
荊門を渡り送別す（遠く荊門の外に渡り～）	李 白	慶弔	46
折楊柳（水辺の楊柳麴塵の糸～）	楊 巨源	慶弔	48
桑乾を渡る（客舎へい州已に十霜～）	賈 島	慶弔	49
草堂に別る（三間の茅舎山に向って開き～）	白 居易	慶弔	50
古別離（別れんと欲して～）	呂 温	慶弔	51
贈別（多情は却って似たり総べて情無きに～）	杜 牧	慶弔	52
送別の詩（楊柳青青として地に著いて垂れ～）	無 名 氏	慶弔	53
送別（水は柔らかかにして器を逐い定め難きを～）	魚 玄機	慶弔	54
送別（落葉聚って還た散ず～）	陳 子龍	慶弔	55
子和の参州に～（唱うるを休めよ陽関～）	山県周南	慶弔	56
別府（楼上～）	広瀬淡窓	慶弔	57
人の長崎に帰るを送る（懶雲夢の如く～）	竹添井井	慶弔	58
送別（今夜同人相筵を催す～）	松口月城	慶弔	59
送別の詩（郷土の夜風情を知らず～）	佐佐木岳甫	慶弔	60
「古今集より」山風に（山風に～）	僧正遍昭	慶弔	61
「古今集より」限りなき（限りなき雲居の～）	読人知らず	慶弔	62
いのちだに「古今集より」	白 女	慶弔	63
「新古今集より」別れての（別れての～）	大江千里	慶弔	64
「拾遺集より」たよりあらば（たよりあらば～）	平 兼盛	慶弔	65
「新古今集より」玉ゆらの（玉ゆらの露も涙～）	藤原定家	慶弔	66
別れても（別れても～）	平野国臣	慶弔	67
江楼にて感を書す（独り江楼に上りて～）	趙 嘏	慶弔	69
孟寂を哭す（曲江院裏～）	張 籍	慶弔	70
悼亡（葉爐経巻生涯を送る～）	王 士禛	慶弔	71
児を弔う（夙に阿兄に学んで好んで篇を手にする～）	町田鳳陽	慶弔	72
追悼の詩（人生は夢の如く亦烟の若し～）	安達漢城	慶弔	73
謹みて蕪詩一篇を靈前に供す（共に吟道を～）	木村岳風	慶弔	74

哀悼の詩（百歳の人生～）	本宮三香	慶弔	76
岳風先生を弔う（憶う君が意気～）	塩谷節山	慶弔	77
木村岳風師の墓を訪ぬ（愛宕山中～）	高田陶軒	慶弔	78
吟友の死を悼む（偲偲友に接して～）	佐佐木岳甫	慶弔	79
ありし世に「新古今集より」（ありし世に～）	藤原兼房	慶弔	80
桜散る「新古今集より」（桜散る春の末には～）	中納言兼輔	慶弔	81
「新古今集より」夜もすがら（夜もすがら～）	大江匡衡	慶弔	82
「新古今集より」そこはかと	慈 円	慶弔	83
なにごと（なにごとみな昔とぞなりに～）	良 寛	慶弔	84
なき人を（なき人をつひの別れと弔へど～）	内柴御風	慶弔	85
本朝文粹より	大江朝綱	慶弔	86
【俳句・俳文他】			
古池や（古池や～）	松尾芭蕉	俳句・俳文他	2
花の雲（花の雲～）	松尾芭蕉	俳句・俳文他	3
鐘ひとつ（鐘ひとつ～）	其 角	俳句・俳文他	4
梅一輪（梅一輪～）	服部嵐雪	俳句・俳文他	5
世の中は（世の中は～）	大島蓼太	俳句・俳文他	6
春の海（春の海ひねもすのたり～）	與謝蕪村	俳句・俳文他	7
菜の花や（菜の花や月は東に日は西に～）	与謝蕪村	俳句・俳文他	8
瘦蛙（瘦蛙～）	小林一茶	俳句・俳文他	9
我と来て（我と来て～）	小林一茶	俳句・俳文他	10
目出度さも（目出度さも～）	小林一茶	俳句・俳文他	11
赤い椿（赤い椿～）	碧 梧桐	俳句・俳文他	12
目には青葉（目には青葉～）	山口素堂	俳句・俳文他	14
松島や（松島や松島や～）	河合曾良	俳句・俳文他	15
閑かさや（閑かさや閑かさや岩にしみ入る～）	松尾芭蕉	俳句・俳文他	16
不二ひとつ（不二ひとつ～）	島崎蕪村	俳句・俳文他	17
さみだれや（さみだれや大河を前に～）	与謝蕪村	俳句・俳文他	18
霖雨や（霖雨や霖雨や～）	木村岳風	俳句・俳文他	19
あつき日の（あつき日のあつき日の～）	木村岳風	俳句・俳文他	20
滝落ちて（滝落ちて滝落ちて～）	秋桜子	俳句・俳文他	21
塚も動け（塚も動け我泣く声は秋の風～）	松尾芭蕉	俳句・俳文他	24
よもすがら（よもすがら秋風聞くや～）	河合曾良	俳句・俳文他	25
蛤の（蛤の～）	松尾芭蕉	俳句・俳文他	26
物いへば（物いへば～）	松尾芭蕉	俳句・俳文他	27

十団子も (十団子も小粒になりぬ秋の風～)	森川許六	俳句・俳文他	28
岩鼻や (岩鼻や～)	去 来	俳句・俳文他	29
此道や (此道や行人なしに秋の暮～)	松尾芭蕉	俳句・俳文他	30
行水の (行水の捨てどころなき～)	上島鬼貫	俳句・俳文他	31
朝顔に (朝顔に朝顔に釣瓶とられて貰ひ水～)	千代女	俳句・俳文他	32
鳥羽殿へ (鳥羽殿へ鳥羽殿へ五六騎いそぐ～)	与謝蕪村	俳句・俳文他	33
九月尽 (九月尽遥かに能登の岬かな～)	加藤暁台	俳句・俳文他	34
露の世は (露の世は露の世ながら～)	小林一茶	俳句・俳文他	35
行く我に (行く我に～)	正岡子規	俳句・俳文他	36
柿くへば (柿くへば鐘が鳴るなり～)	正岡子規	俳句・俳文他	37
鶏頭の (鶏頭の十四五本も～)	正岡子規	俳句・俳文他	38
をととひの (をととひの～)	正岡子規	俳句・俳文他	39
芋の露 (芋の露～)	蛇 笏	俳句・俳文他	40
あはれ子の (あはれ子の夜寒の床の～)	中村汀女	俳句・俳文他	41
旅に病んで (旅に病んで夢は枯野をかけ廻る～)	松尾芭蕉	俳句・俳文他	44
是がまあ (是がまあ～)	小林一茶	俳句・俳文他	45
ともかくも (ともかくもともかくもあなた～)	小林一茶	俳句・俳文他	46
いくたびも (いくたびも～)	正岡子規	俳句・俳文他	47
遠山に (遠山に日の当りたる枯野かな～)	高浜虚子	俳句・俳文他	48
流れ行く (流れ行く大根の葉の～)	高浜虚子	俳句・俳文他	49
降る雪や (降る雪や～)	中村草田男	俳句・俳文他	50
海に出て (海に出て～)	山口誓子	俳句・俳文他	51
分け入っても (分け入っても～)	種田山頭火	俳句・俳文他	53
うしろ姿の (うしろ姿の～)	種田山頭火	俳句・俳文他	55
うどん供へて (うどん供へて～)	種田山頭火	俳句・俳文他	56
「野ざらし紀行より」旅立ち	松尾芭蕉	俳句・俳文他	60
「笈の小文より」旅立ちの一節 (百骸九竅の～)	松尾芭蕉	俳句・俳文他	64
「おくのほそ道」より平泉	松尾芭蕉	俳句・俳文他	68
「おくのほそ道」より平泉	松尾芭蕉	俳句・俳文他	68
「おくのほそ道より」最上川 (最上川は～)	松尾芭蕉	俳句・俳文他	72
「おくのほそ道より」最上川 (最上川は～)	松尾芭蕉	俳句・俳文他	72
銀河の序 (越後の国出雲崎といふ～)	松尾芭蕉	俳句・俳文他	76
七月六日たなばたの心を～ (いつしかと～)	藤原兼輔朝臣	俳句・俳文他	84
老木桜 (或る山寺に～)	小林一茶	俳句・俳文他	86
翌もあり (翌もありあさてもありと～)	小林一茶	俳句・俳文他	89

直なるも（直なるも曲がるも同じ世の中ぞ～）	小林一茶	俳句・俳文他	91
降りながら（降りながら～）	小林一茶	俳句・俳文他	93
念仏坊（追風や～）	小林一茶	俳句・俳文他	95
老の身は（老の身は～）	小林一茶	俳句・俳文他	97
草枕（夕波くらく啼く千鳥～）	島崎藤村	俳句・俳文他	100
秋風の歌（しづかに～）	島崎藤村	俳句・俳文他	104
小諸なる古城のほとり（小諸なる古城の～）	島崎藤村	俳句・俳文他	107
千曲川旅情のうた（昨日またかくてありけり～）	島崎藤村	俳句・俳文他	110
暮坂峠（乾きたる落葉のなかに栗の實を～）	若山牧水	俳句・俳文他	114
雨ニモマケズ（雨ニモマケズ～）	宮沢賢治	俳句・俳文他	118
心に太陽を持って（心に太陽を持って～）	山本有三	俳句・俳文他	123
青春（青春とは人生の或る期間を～）	サミュエルマン	俳句・俳文他	127
【朗詠集】			
東の野（東の～）	柿本人麻呂	朗詠集	12
病に沈みし時の歌（士やも～）	山上憶良	朗詠集	14
子等を思ふ歌の反歌（銀も金も玉も～）	山上憶良	朗詠集	16
不盡の山を望める歌の反歌（田兒の浦ゆ～）	山部赤人	朗詠集	18
不盡の山を望める歌の反歌（田兒の浦ゆ～）	山部赤人	朗詠集	18
多摩川（多摩川にさらす手作りさらさらに～）	（作者未詳）	朗詠集	20
唐土にて月を見て詠みける（天の原～）	安部仲麻呂	朗詠集	22
唐土にて月を見て詠みける（天の原～）	安部仲麻呂	朗詠集	22
海（海ならず～）	菅原道眞	朗詠集	24
東風吹かば（東風吹かば匂ひおこせよ～）	菅原道眞	朗詠集	26
櫻の花の散るをよめる（ひさかたの光のど～）	紀 友則	朗詠集	28
山吹（七重八重～）	兼明親王	朗詠集	30
山吹（七重八重～）	兼明親王	朗詠集	30
夏月をよめる（にはの面はまだかわかぬに～）	源 頼政	朗詠集	32
しづのをだまき（しづやしづしづのをだまき～）	静御前	朗詠集	34
「三夕の歌」こころなき（心なき身にもあは～）	西行法師	朗詠集	36
「三夕の歌」こころなき（心なき身にもあは～）	西行法師	朗詠集	36
なでしこ（かきわけて折れば露こそ～）	西行法師	朗詠集	38
「三夕の歌」さびしきは（寂しさはその色としも～）	寂蓮法師	朗詠集	40
「三夕の歌」さびしきは（寂しさはその色としも～）	寂蓮法師	朗詠集	40
春の山（昔たれ～）	藤原良經	朗詠集	42
伊豆の海（箱根路を～）	源 實朝	朗詠集	44

伊豆の海（箱根路を～）	源 實朝	朗詠集	44
「三夕の歌」見わたせば（見わたせば花も紅葉も～）	藤原定家	朗詠集	46
「三夕の歌」見わたせば（見わたせば花も紅葉も～）	藤原定家	朗詠集	46
百首歌たてまつりし時（駒とめて～）	藤原定家	朗詠集	48
山ざくら（敷島の～）	本居宣長	朗詠集	50
山路（月よみの～）	良 寛	朗詠集	52
同じところ（世の中に～）	良 寛	朗詠集	54
花すすき（ひとかたに～）	香川景樹	朗詠集	56
安政六年十月廿日書簡（親思ふ～）	吉田松陰	朗詠集	58
安政六年十月廿日書簡（親思ふ～）	吉田松陰	朗詠集	58
武蔵の野邊（身はたとひ～）	吉田松陰	朗詠集	60
わが身ありとは（君が世を～）	梅田雲濱	朗詠集	62
富士（晴れてよし～）	山岡鐵舟	朗詠集	64
天（あさみどり澄み渡りたる大空の～）	明治天皇御製	朗詠集	66
日（さしのぼる～）	明治天皇御製	朗詠集	68
日（さしのぼる～）	明治天皇御製	朗詠集	68
ふるさとの山（ふるさとの～）	石川啄木	朗詠集	70
軽きに泣きて（たはむれに母を背負ひて～）	石川啄木	朗詠集	72
柳あをめる（やはらかに～）	石川啄木	朗詠集	74
こだま（ふるさとの谷のこだまに～）	石川啄木	朗詠集	76
諏訪湖畔（みづうみの氷は解けてなほ寒し～）	島木赤彦	朗詠集	78
中國を巡りて（幾山河超えさり行かば～）	若山牧水	朗詠集	80
心の鐘（今日もまた心の鐘を～）	若山牧水	朗詠集	82
白鳥は（白鳥はかなしからずや空の青～）	若山牧水	朗詠集	84
酒（しらたまの菌に沁みとほる～）	若山牧水	朗詠集	86
山水（眞木ふかき～）	今井邦子	朗詠集	88
春（春ここに～）	佐佐木信綱	朗詠集	90
結婚祝ひの歌（天の戸の～）	小田観螢	朗詠集	92
子等を思ふ歌一首（瓜食めば～）	山上憶良	朗詠集	94
鎌倉懷古（鎌倉の幕府は何所～）	窪田空穂	朗詠集	97
古池や（古池や～）	松尾芭蕉	朗詠集	100
荒海や	松尾芭蕉	朗詠集	101
閑かさや（閑かさや閑かさや岩にしみ入る～）	松尾芭蕉	朗詠集	102
奥州高館にて（夏草や～）	松尾芭蕉	朗詠集	103
塚も動け（塚も動け我泣く声は秋の風～）	松尾芭蕉	朗詠集	104

春景（菜の花や月は東に日は西に～）	與謝蕪村	朗詠集	105
春の海（春の海ひねもすのたり～）	與謝蕪村	朗詠集	106
我と来て（我と来て～）	小林一茶	朗詠集	107
瘦蛙（瘦蛙～）	小林一茶	朗詠集	108
雪五尺（これがまあ～）	小林一茶	朗詠集	109
なが霖や（なが霖やなが霖や～）	木村岳風	朗詠集	110
昨日にまさる～（昨日にまさる戀しさの～）	萩原朔太郎	朗詠集	114
秋風の歌（しづかに～）	島崎藤村	朗詠集	118
希望（沖の汐風吹きあれて白波いたく～）	土井晩翠	朗詠集	122
星落秋風五丈原（○山悲秋の風更けて～）	土井晩翠	朗詠集	124
鶯のうへ（あはれ花びらながれ～）	三好達治	朗詠集	131
現身（春はいま空のながめにあらはるゝ～）	三木露風	朗詠集	134
「陸游作」雑興（草鋤けど春は萌え萌ゆ～）	佐藤春夫訳	朗詠集	138
【和歌上巻】			
「古事記より」八雲立つ（八雲立つ～）	須佐之男命	和歌上巻	2
難波津に（難波津に咲くや木の花冬ごもり～）	王 仁	和歌上巻	4
貢物許されて国富めるを～（たかき屋に～）	仁徳天皇	和歌上巻	6
聖徳太子～（級照るや片岡山に飯に飢ゑて～）	聖徳太子	和歌上巻	8
題しらず（秋の田の 仮庵の庵の～）	天智天皇	和歌上巻	10
有間皇子、自ら傷みて～（家にあれば～）	有間皇子	和歌上巻	12
柿本朝臣人麻呂の～（天離る鄙の長道ゆ～）	柿本人麻呂	和歌上巻	16
軽皇子、安騎の野に～（東の野にかぎろいの～）	柿本人麻呂	和歌上巻	18
柿本朝臣人麻呂の歌一首（近江の海夕波千鳥～）	柿本人麻呂	和歌上巻	20
慶雲三年丙午、難波宮に～（葦辺行く鴨の～）	志貴皇子	和歌上巻	22
太宰帥大伴卿～（験なきものを思はずは～）	大伴旅人	和歌上巻	24
この世にし（この世にし楽しくあらば～）	大伴旅人	和歌上巻	26
子等を思ふ歌一首（瓜食めば～）	山上憶良	和歌上巻	28
沈痾の時の歌一首（士やも空しかるべき～）	山上憶良	和歌上巻	32
山部宿禰～（天地の～）	山部赤人	和歌上巻	34
神亀元年～（若の浦に潮満ち来れば濁をなみ～）	山部赤人	和歌上巻	38
題しらず（ももしきの～）	作者不詳	和歌上巻	40
二十三日に興に依りて作る歌（春の野に～）	大伴家持	和歌上巻	42
三年春正月一日に～（新しき年の初めの～）	大伴家持	和歌上巻	44
三年春正月一日に～（新しき年の初めの～）	大伴家持	和歌上巻	44
防人の歌（父母が頭搔き撫で～）	丈部稲麻呂	和歌上巻	46

武蔵の国の歌（多摩川に～）	作者不詳	和歌上巻	48
唐土にて月を見て詠みける（天の原～）	阿部仲麿	和歌上巻	50
唐土にて月を見て詠みける（天の原～）	阿部仲麿	和歌上巻	50
題しらず（ほのぼのと～）	作者不詳	和歌上巻	52
題しらず（世の中は～）	作者不詳	和歌上巻	54
比叡山中堂建立の時（阿耨多羅～）	伝教大師	和歌上巻	56
題しらず（花の色は～）	小野小町	和歌上巻	58
駿河国うつ～（するがなるうつのやまべの～）	在原業平	和歌上巻	60
月やあらぬ（月やあらぬ春や昔の春ならぬ～）	在原業平	和歌上巻	62
五節の舞姫を見て詠める（天つ風～）	良岑宗貞	和歌上巻	64
流され侍りける時～（東風吹かば匂ひ～）	菅原道真	和歌上巻	66
流され侍りける時～（東風吹かば匂ひ～）	菅原道真	和歌上巻	66
海（海ならず～）	菅原道真	和歌上巻	68
舊年に春たちける日よめる（年のうちに～）	在原元方	和歌上巻	70
櫻の花の散るをよめる（ひさかたの光のど～）	紀 友則	和歌上巻	72
白菊の花をよめる（心あてに折らばや折らむ～）	凡河内躬恒	和歌上巻	74
平定文が家歌合に～（春立つといふばかり～）	壬生忠岑	和歌上巻	76
春立ちける日詠める（袖ひちて～）	紀 貫之	和歌上巻	78
七重八重（七重八重花は咲けども山吹の～）	兼明親王	和歌上巻	80
心かはり侍りける女に～（契りきな～）	清原元輔	和歌上巻	82
天曆の御時の歌合（忍ぶれど色に出でにけり～）	平 兼盛	和歌上巻	84
屏風に（わが宿の～）	源 順	和歌上巻	86
入道撰政まかりたりけるに～（嘆きつつ～）	右大将道綱母	和歌上巻	88
題しらず（なげやなげ～）	曾禰好忠	和歌上巻	92
題しらず（山城の～）	曾禰好忠	和歌上巻	94
逢坂の関に庵室を造りて住み～（これやこの～）	蟬丸	和歌上巻	96
一条院の御時、～（いにしへの～）	伊勢大輔	和歌上巻	98
題しらず（寂しさに～）	和泉式部	和歌上巻	100
性空上人のもとに詠みて～（暗きより暗き～）	和泉式部	和歌上巻	102
大江山（大江山生野の道の～）	小式部内侍	和歌上巻	104
早くより童友だちに～（めぐりあひて～）	紫式部	和歌上巻	108
題しらず（遙かなる～）	大式三位	和歌上巻	110
みちのくに～（都をば～）	能因法師	和歌上巻	112
師賢朝臣の梅津の山里に～（夕されば～）	源 経信	和歌上巻	114
堀河院の御時～（照射する～）	大江匡房	和歌上巻	116

障子の絵に～（ふるさとはちるもみぢばに～）	源 俊頼	和歌上巻	118
夏月をよめる（にはの面はまだかわかぬに～）	源 頼政	和歌上巻	120
陸奥の国に平泉に～（ききもせず～）	西行法師	和歌上巻	122
なでしこ（かきわけて折れば露こそ～）	西行法師	和歌上巻	124
「三夕の歌」こころなき（心なき身にもあは～）	西行法師	和歌上巻	126
「三夕の歌」こころなき（心なき身にもあは～）	西行法師	和歌上巻	126
題しらず（津の国の～）	西行法師	和歌上巻	128
題しらず（寂しさに～）	西行法師	和歌上巻	130
静 若宮八幡へ参詣の事	静御前	和歌上巻	132
百首歌奉りける時、秋の歌とて～（夕されば～）	藤原俊成	和歌上巻	134
守覚法親王家に～（たちかえり又もきて見ん～）	藤原俊成	和歌上巻	136
「三夕の歌」さびしきは（寂しきはその色としも～）	寂蓮法師	和歌上巻	138
「三夕の歌」さびしきは（寂しきはその色としも～）	寂蓮法師	和歌上巻	138
五十首歌奉りし時（村雨の霧もまだ干ぬ～）	寂蓮法師	和歌上巻	140
左大臣家「十楽の心」（むらさきの雲ぢに～）	寂蓮法師	和歌上巻	142
左大臣家「十楽の心」（むらさきの雲ぢに～）	寂蓮法師	和歌上巻	142
百首歌奉りし時、春の歌（山深み～）	式子内親王	和歌上巻	144
百首歌奉りし時、秋の歌（桐の葉も～）	式子内親王	和歌上巻	146
立春の心を詠み侍りける（み吉野は～）	藤原良経	和歌上巻	148
家に花五十首歌よませ侍りける時（昔たれ～）	藤原良経	和歌上巻	150
鴨社歌合とて人々よみ侍りけるに～（石川や～）	鴨 長明	和歌上巻	152
はこねにまうづとて（箱根路を～）	源 実朝	和歌上巻	154
はこねにまうづとて（箱根路を～）	源 実朝	和歌上巻	154
五十首歌奉りし時、月の前に～（大江山～）	慈 円	和歌上巻	156
春のころ大乘院より～（みせばやな～）	慈 円	和歌上巻	158
題しらず（おほけなく～）	慈 円	和歌上巻	160
寛喜元年女御入内屏風（風そよぐ～）	藤原家隆	和歌上巻	162
をのこども詩を作りて～（見わたせば～）	後鳥羽院	和歌上巻	164
「三夕の歌」見わたせば（見わたせば花も紅葉も～）	藤原定家	和歌上巻	166
「三夕の歌」見わたせば（見わたせば花も紅葉も～）	藤原定家	和歌上巻	166
守覚法親王の五十首歌に（しもまよふ～）	藤原定家	和歌上巻	168
百首歌たてまつりし時（駒とめて～）	藤原定家	和歌上巻	170
【和歌下巻】			
夏の歌の中に（枝に洩る朝日のかげの～）	京極為兼	和歌下巻	2
海路の眺望を（浪の上に～）	京極為兼	和歌下巻	4

夕の花を（花の上に～）	永福門院	和歌下巻	6
秋の御歌に（真萩散る～）	永福門院	和歌下巻	8
題しらず（いかにして～）	冷泉為相	和歌下巻	10
嘉元百首歌に、山家を（庵近きつま木の道や～）	冷泉為相	和歌下巻	12
暮山雪（渡りかね雲も夕をなほたどる～）	正 徹	和歌下巻	14
露と落ち（露と落ち露と消えにしわが身かな～）	豊臣秀吉	和歌下巻	16
故郷月（里は荒れて～）	木下長嘯子	和歌下巻	18
富士の山の歌あまた～（ふじのねに～）	下河辺長流	和歌下巻	20
鶯（なげやなげ～）	荷田春満	和歌下巻	22
嵐（しなのなる～）	賀茂真淵	和歌下巻	24
山ざくら（敷島の～）	本居宣長	和歌下巻	26
桜花三百首「あらたまの」（あらたまの～）	本居宣長	和歌下巻	28
桜花三百首「日ぐらしに」	本居宣長	和歌下巻	30
桜花三百首「日ぐらしに」	本居宣長	和歌下巻	30
霞中春雨（隅田川蓑着て下す～）	橘 千蔭	和歌下巻	32
うづまさにてひとりながめて（太秦の～）	小沢蘆庵	和歌下巻	34
薄随風（ひとかたに靡きそろひて花すすき～）	香川景樹	和歌下巻	36
露の世は	良 寛	和歌下巻	38
憶ふ（草枕夜ごとに変わる～）	良 寛	和歌下巻	40
同じころ（世の中に～）	良 寛	和歌下巻	42
このごろ出雲崎にて（たらちねの母が～）	良 寛	和歌下巻	44
非常之変に立到り申し候（親思ふ～）	吉田松陰	和歌下巻	46
非常之変に立到り申し候（親思ふ～）	吉田松陰	和歌下巻	46
身はたとひ（身はたとひ～）	吉田松陰	和歌下巻	48
わが身ありとは（君が世を～）	梅田雲濱	和歌下巻	50
春よみける歌の中に（すすくと～）	橘 曙覧	和歌下巻	52
人あまたありて～（赤裸の～）	橘 曙覧	和歌下巻	54
人あまたありて～（赤裸の～）	橘 曙覧	和歌下巻	54
獨楽吟（たのしみは三人の児どもすすくと～）	橘 曙覧	和歌下巻	56
赤心報国（国を思ひ寝られざる夜の霜の色～）	橘 曙覧	和歌下巻	58
晩の鐘（いつよりか入相のかねはなりつらむ～）	大隈言道	和歌下巻	60
あかつき方に出で立つ時に（をしからぬ～）	野村望東尼	和歌下巻	62
山家（山里は松の声のみ～）	太田垣蓮月尼	和歌下巻	64
富士（晴れてよし～）	山岡鉄舟	和歌下巻	66
富士（晴れてよし～）	山岡鉄舟	和歌下巻	66

火に焼かれ（火に焼かれ～）	井上円了	和歌下巻	68
萩寺にてよめる歌～（萩寺の萩おもしろし～）	落合直文	和歌下巻	70
今朝の朝の（今朝の朝の露ひやびやと～）	伊藤左千夫	和歌下巻	72
くれないの（くれないの二尺のびたる薔薇の～）	正岡子規	和歌下巻	74
夕顔の（夕顔の～）	正岡子規	和歌下巻	76
毛越寺懐古（大門の～）	佐佐木信綱	和歌下巻	78
大和ぶり（ゆく秋の～）	佐佐木信綱	和歌下巻	80
春（春ここに～）	佐佐木信綱	和歌下巻	82
われ男の子（われ男の子～）	与謝野鉄幹	和歌下巻	84
つけ捨てし（つけ捨てし野火の烟のあか～）	尾上柴舟	和歌下巻	86
諏訪湖畔（みづうみの氷は解けてなほ寒し～）	島木赤彦	和歌下巻	88
鉦鳴らし（鉦鳴らし～）	久保田空穂	和歌下巻	90
鎌倉懐古（鎌倉の幕府は何所～）	窪田空穂	和歌下巻	92
「恋衣」より海恋し（海恋し潮の遠鳴り～）	与謝野晶子	和歌下巻	96
「恋衣」より海恋し（海恋し潮の遠鳴り～）	与謝野晶子	和歌下巻	96
「恋衣」より海恋し（海恋し～）	与謝野晶子	和歌下巻	98
やは肌の（やは肌の～）	与謝野晶子	和歌下巻	100
白埴の（白埴の瓶こそよけれ～）	長塚 節	和歌下巻	102
死にたまふ母「みちのくの～」	斎藤茂吉	和歌下巻	104
死にたまふ母「みちのくの～」	斎藤茂吉	和歌下巻	104
死にたまふ母「のど赤き」（のど赤き）	斎藤茂吉	和歌下巻	106
死にたまふ母「のど赤き」（のど赤き）	斎藤茂吉	和歌下巻	106
向日葵は（向日葵は～）	前田夕暮	和歌下巻	108
春の鳥（春の鳥～）	北原白秋	和歌下巻	110
指をもて（指をもて～）	土岐善麿	和歌下巻	112
りんてん機（りんてん機～）	土岐善麿	和歌下巻	114
中國を巡りて（幾山河超えさり行かば～）	若山牧水	和歌下巻	116
白鳥は（白鳥はかなしからずや空の青～）	若山牧水	和歌下巻	118
小諸懐古園にて（かたはらに～）	若山牧水	和歌下巻	120
酒（しらたまの歯に沁みとほる～）	若山牧水	和歌下巻	122
心の鉦（今日もまた心の鉦を～）	若山牧水	和歌下巻	124
夢（夢ならで～）	若山牧水	和歌下巻	126
牡丹花は（牡丹花は～）	木下利玄	和歌下巻	128
ふるさとの山（ふるさとの～）	石川啄木	和歌下巻	130
こだま（ふるさとの谷のこだまに～）	石川啄木	和歌下巻	132

やはらかに (やはらかに～)	石川啄木	和歌下巻	134
たはむれに (たはむれに母を背負ひて～)	石川啄木	和歌下巻	136
友がみな (友がみなわれよりえらく見ゆる～)	石川啄木	和歌下巻	138
葵祭 (地に落ちし～)	吉井 勇	和歌下巻	140
吉野上市 (ふるさとに～)	土屋文明	和歌下巻	142
山水 (眞木ふかき～)	今井邦子	和歌下巻	144